



2021 日本のうたごえ祭典 in ひろしま

企画ニュース⑥

発行 2021.9.18

祭典企画委員会

コンサートヒロシマ・II 「青い空は」の合唱団員募集の取り組み(その2)

様々な立場、考え方、世代を超えて 心一つに 歌いましょう！

二つの被団協を訪問

7 月末、被団協(広島県原爆被害者団体協議会、佐久間理事長)を訪問したのに続き、8 月末に、もう一つの被団協(坪井直理事長)を広島合唱団の三宅徳子さんと一緒に訪問し、祭典チラシと「青い空は」の合唱団員募集のチラシを渡して、「核兵器禁止条約発効！ひかりにむかって」という祭典のテーマについて



説明しました。その中で「広島と全国のうたごえの仲間が被爆者を囲む形で「青い空は」を歌うステージをつくりたい」という高田企画委員長の熱い思いを伝え、それを実現するための合唱団員募集をお願いしたところ、「被団協の仲間に声をかけてみましょう。」と力強い返事をいただきました。

ハチドリ舎、カクワカ広島…若者とともに

1 週間後、Social Book Café ハチドリ舎(このお店では語り部による被爆体験の継承活動が行われています)の中にある“カクワカ広島(核政策を知りたい広島若者有権者の会)”を被爆 2 世である広島合唱団の吉田真理子さんと共に訪れ、「被爆者がメインですが、核兵器禁止条約の発効を祝い、また次の世代、さらに次の世代へとこの運動を継承していくために、若者の皆さんもぜひ一緒にステージに立って『青い空は』を歌ってほしい。」とお願いしました。お話ししていると、お店の中から「♪あおいそらは あおいままで…♪」という年配の方の歌声が聞こえてきました。対応してくださったメンバーの方から「私たち若者だけでなく、親の世代、祖父母の世代にも声をかけてみます。」とうれしいお返事があり、その日のうちに「私もこの歌は好きなので、ぜひ参加したい。」と、弾んだ声で電話をいただきました。この企画の盛り上がりを感じ、目の前がパッと明るくなりました。

被爆者、被爆二・三世と共に

また、広島合唱団の吉田さんには自らも会員である「広島県被爆二・三世の会」にも、合唱団員募集のための声かけをしていただくことになりました。

さらにメンバーの中に被爆者の方がおられる合唱サークル「呉うたごえたんぼぼ」と「音戸ファミリーコーラス」にも指導者の高田さんからお誘いをかけていただけることになり、どんどん輪が広がってきています。

コンサートヒロシマ・Ⅱのプログラム 1 番「広島へ」に出演する“全国青年のうたごえ合同”の方たちもそのままステージに残って「青い空は」の合唱に加わることになり、とても心強くなってきました。

様々な立場、考え方、世代を超えて“核兵器廃絶”という共通の願いに向かって、心を一つにして「青い空は」を声高らかに合唱する日が少しずつ近づいてきているように思います。多くの人の協力で、合唱団員募集のすそ野を広げることができたことは私にとって大きな収穫となりました。

(企画委員 西村 美子)

広島の水

広島は太田川の三角州（デルタ）にできた町なので水の都と言われてきました。

戦前は東から猿猴川、京橋川、元安川、本川、天満川、福島川、山手川と7本の川が流れていました。

戦後、庚午と観音の間にあった山手川と福島川を、大雨のとき効率よく大量の水を流せるようにと人工的に掘削し、大きな1つの川として現在の太田川放水路としたため、今は6本です。

また、広島の水は昔から交通の重要な移動、運搬手段だった時の名残で雁木（がんぎ）が多く残されています。雁木はどんな潮位でも船をつけられる便利な船着き場です。

祭典合唱団が歌う2曲が広島の水を主題にしています。

「ひろしまへ」では「涙をみんな飲み込んでくれる。どれほどの涙を運んでもらったことか」「七つの川は流れながらちやぷちやぷ笑ったりもする」と歌われ、「広島 愛の水」でも川に向かって「怒り、悲しみ、優しさを」、「語ろうよ、伝えよう、誓おうよ」と歌い、世界の海へ「流れ行く・流れ着く・巡り行く」と歌われます。

「あの日」も流れていた広島の水。

「これらの川ほど数しれぬ死者を浮かべた川は他にないだろう、その川。」と「ヒロシマノート」に大江健三郎さんは記しています。

(企画委員 斎藤知裕)